

教員有志でジェットコースター造り

—文化祭づくりから見えてきたもの—

井上 和夫

正智深谷高校

飲食店に偏り、準備に時間をかけない出し物を何とかしようと思いつつ、「生徒の意見を尊重する」という大義名分に迎合して、結局は飲食店に落ち着いてしまふ文化祭が、本校に勤め始めてから10年近く続いていました。自分自身は、高校生のときに文化祭で多くのものを得てきました。この経験を、今を生きる生徒たちにも体験してもらいたいという願いは、室内の装飾に時間をかけさせるなど、表面的には叶えられたという自負はあります。しかし、「あれでよかつたのだからか……？」という疑問を払拭できず、無力感に苛まれていたのも事実です。そんなことを他の先生と話し合っているなかで、「ジェット・コースターを作ろう」という企画が持ち上がり、あれよあれよという間に実際に作るようになってしまいました。しかし、本心では、文化祭に教員が主体的に関わっていくことに疑問を持っており、「教員が文化祭の出し物を自ら創ることに何の意味があるのか、教員が楽しんで生徒は何を得るのか」という矛盾を抱えた船出でした。

教師・生徒に変化が…

文化祭1週間前あたりからジェット・コースターの土台を組み始めたときは、想像していた通り、教員だけが汗を流し、例年以上に「これでよいのか……？」という気持ちが強くなり、後ろ向きな気持ちが広がる一方でした。しかし、ジェット・コースターの全貌が徐々に明らかになってくるにつれて、他の教員からの助言や激励が増え、自分たちの取り組みが有機的に学校に広がってきている感覚を肌で感じられるようになりました。さらに、ジェット・コースターの設置場所が、登校する生徒の目に留まるところにあったのも奏功して、生徒も好奇、羨望の目でコースを眺めるようになってきて、「先生、何つくってるんですか？」というような声をかけてくれるようになってきました。この頃から自分の気持ちも少しずつ前向きになってきたように思います。そして、文化祭前日には学校で文化祭への出店が禁止されているはずの特進コースの生徒が「何かできることはありませんか？」と、手伝いに名乗りをあげてくれるまでに至りました。最終的には10人を超える特進コースの生徒がコースの設計に携わるようになり、少数の教員で細々と進めてきた作業が、一気に勢いを

つけはじめました。

机上の学問が活用され 色彩を帯びて

生徒のアイデアは教員の想像をはるかに凌駕しており、「摩擦係数」、「加速度」、「位置エネルギー」などといった、物理用語が盛んに飛び交うようになりました。その議論の中で、ジェット・コースターを終盤で減速させるために、台車後部に紐をつけ、その先におもりをつけるなどのアイデアが実現されました。机上では無機質に処理されるだけの学問が、目の前にある問題の解決に活用され、色彩を帯びていく様を見ることができたのは教員冥利に尽きる瞬間です。

いつもは雑用を頼んでも嫌な顔をするような生徒でも、率先して整理整頓をし、始業ぎりぎりには登校しないような生徒が、他の生徒に先駆けて朝一番に登校して、家で考えてきたアイデアを実現すべく、他の生徒に指示を出している場面もありました。

「職人」と呼ばれる生徒

文化祭当日には、頼んでもいないのに役割分担をし、設計に携わった生徒全員が、他の出し物を見る時間を割いてまで、ジェット・コースターの運営につきっきりになってくれました。そして、当日の運営には教員はほとんどかかわることなく、生徒たちの力だけで進めたのです。それは今までに見たことのないような計画力であり、一人一人が自分の「持ち場」の責任をしっかりと果たし、「職人」と呼ばれる生徒まで出現したほどです。文化祭終了後の片付時には「壊すのがもつたいない」「来年もやりたい!」「来年やるなら呼んでください!」という声が聞かれ、生徒たちの充実感を感じ取ることもできました。

そしてその生徒たちの勢いは、片付けにおいても如何なく発揮されます。教員の中では何日か掛けてゆっくりやっていたことにしていたにも関わらず、想像以上に生徒が機敏に動き、数時間のうちに、かつてそこに巨大なジェット・コースターのコースがあったとは想像できない、以前の姿が回復されていました。まさに「夢の跡」です。彼らはその後、自分たちとはまったく関係のない、入場門の撤収まで駆り出されたものの、嫌な顔ひ

とつせず、その機動力を存分に発揮した
そりです。

「感動の共有」こそ、 人間育成の鍵

本校では、特進コースの生徒に対しては、3年次の文化祭には主体的に参加できないことになっていきます。それは、「文化祭の準備にかかるエネルギーを学習に向けてほしい」との配慮からなのですが、今回の文化祭における彼らの存在は、その考えに一石を投じるものになったものと確信しています。準備の段階では日頃学んできた学習の成果を生かして「ものづくり」にあたり、互いに協力することによって、人間関係をより強固なものとしたのです。受験勉強は、「自身自身との戦い」なので、個人主義になりがちなのは否定できない事実です。しかし、生徒がわからない生徒に教え、切磋琢磨することで自分も理解を深めるのは、最も効果的な学習方法の一つです。その学習方法が、互いに信頼しあえる関係を前提にしていることは言うまでもありません。真の人間関係があるからこそ、他者に惜しみなく力を貸せるのであり、

真正面から人と向き合うことによつて対象の本質が見えるようになるのです。今回の文化祭における彼らの取り組みは、多くの教員から異口同音に「いい顔をしていたねえ」といわれるまでの評価を得ており、この中で得られた感動の共有は、真の人間関係を醸成する有効な手段であると思います。

「燃えつき」は杞憂

文化祭を終えて数日しか経っていませんが、多くの教員が懸念していた、文化祭の興奮を引きずつて注意力が散漫になる「宴のあと」の燃え尽き症候群は、杞



憂に終わったように思います。というのも、文化祭を終えた後から受験に関する質問が急増したからです。「教員まで感傷的になりやがって……」との向きもあるかもしれませんが、複数の教員による感想であり、「過大評価」と括ってしまうのは些か短絡的だと思えます。今回の文化祭において、彼らから無意識のうちに発せられた「高校生活3年間の中で最も充実していた。来年もやりたい。」ということばとその後の彼らの行動を見て、文化祭がスイッチのオン、オフだけではなく、社会性、リーダーシップ、人間関係、協働などの、社会に出てから必要とされる資質を育む重要な機会であることを、再認識させられました。

進学校こそ「行事」が生きる

とかく、長期的展望にたつて計画的に取り組まなければならない「受験」という極限状況にあつて、スイッチのオン、オフが大切なのは多くの教員が認めていることでしよう。本校には「体育コース」なるものが存在します。このコースの卒業生が、受験において多くの成功を勝ち

取っています。彼らの強みは、他の生徒が勉強をしていた時間に、部活動にエネルギーを集約せねばならず、この不利を取り戻すべく、受験直前に爆発的な集中力を発揮してその成果を結実させた点に尽きます。文化祭は、体育コースの生徒にとつての「部活動」と同じ役割を担っていると思えます。文化祭に全精力を注ぎ入れたことによつて、その期間はスイッチがオフであつたことを意識し、その後退を取り戻すべく再びスイッチをオンにすることによつて、加速度のある学習ができるのではないのでしょうか。文化祭に参加することによつて受験勉強が中断してしまうのは、学習主体の観点からするとマイナスの要因が強い点は否めません。それを悪とするならば、所謂進学校において文化祭は衰退していくはずですが、しかしながら、これらの学校において文化祭や体育祭が衰退するどころか、より活況の状況を呈しているのは、行事がもつ本来の意味を進学校が認識しているからに違いありません。

教師の目——もう一方の視点から——

一緒にこの企画を作り上げた、先生は次のような視点で振り返ってくれています。

「ものづくり大学の協力により成功した有志展示」

土門憲司

教員有志3人からはじまったジェットコースターの企画も、ものづくり大学の協力なしには成功しなかっただろう。このきっかけは、たまたま自分が担任した卒業生がものづくり大学に進学したことにある。その生徒を通じて、大学の備品を拝借できることがわかり



計画実行に大きな弾みをつけた。

文化祭を数週間後に控え、一度ものづくり大学へ事前の挨拶とどのようなものを借りられるのか確認しに訪問する事になった。そこで初めてものづくり大学の施設や実習内容等を知る事になり、その専門性の高さや、男の子なら昔覚えたような模型を作る感覚の物をつくる楽しさや面白さがそこにはあった。実際の古寺を敷地内へ移し修復、再構築しているところでは職人の技術を目の当たりにした。

「百聞は一見にしかず」とはよく言うもので、自分が高校教諭としてこれ



までいかに狭い視野で進路指導をしていたか思い知らされる。この経験は自分にとって学力偏重に対するモヤモヤとした疑念に一つの方向を示してくれたように感じる。学力は確かに大切な物であるが、そこに偏りすぎた進学指導をいかなものかと感じていた。難関大学を目指し、そこに合格する事を目的とした学習指導に行き詰まりも感じており、その先にあるものが見えなかった。失礼な言い方かも知れないが、ものづくり大学はそれ程入るのが難しい大学ではない。しかし、ものづくり大学で学んでいる学生達にはその先にあるものが見えるような気がした。もちろん、難関大学合格者でもその先をしっかりと見据えて真剣に学習に取り組む人は少なくないと思うが。

人とのつながりが 生み出す可能性

そのような「進学」に対する意識の変化ともう一つ私を感じた事は、人とのつながりにより、さらに創造的な取り組みが出来るのではないかという可能性である。人間関係が希薄になって



きた昨今、このような横のつながりを広げて、新たな取り組みを通じ、人とのコミュニケーション能力、創造力、そして集団の中での協調性など様々な因子が学習できると考える。また、高校単独では不可能な企画も、より専門性の高い大学との連携により可能になることも多いと考える。大学の募集活動の一環の高大連携、出前授業などよりも、数段「面白い」ことが出来るで

あろう。これは工業系や理系に限ったことではないと思う。文学、史学、社会学など他の分野でも可能な取り組みであると考えられるし、また、連携する対象は大学に限らず、地域企業との連携なども考えられる。おそらくこのような大学との連携や地域との連携は他校でも行われていると思うので、互いの情報交換なども出来ればさらに、横のつながりが広がるのではないかと。今後、さらにこのような連携に関し情報収集し研究して行きたいと考える。

みんな輝いていた —生徒の感想

参加した生徒たちは次のような感想を書いてくれました。

今回はたまたま先生達主催の滑り台製作に加わることになったが、多分3年間で一番頑張ったし、一番印象に残っているイベントだと思う。

最初は興味があっただけという理由で参加させてもらったけど、形が見えるにしたがって、今までの物理の授業を駆使(?)してみんなが計算しなが

ら作っていくようになった。いろいろと試行錯誤しながら、形になったときには達成感があり参加してよかったと思えた。

当日の運転では、残念なことに怪我人がでてしまった。その子どもには本当に申し訳なかったけれど、乗った人々が笑って帰ってくれたから、作ったかきがあったなと思った。また、隣の家と(騒音で)トラブルもあったが、理解してくれて当日は大成功だったと思う。

今回の体験は、とても充実していたし、普段は「教える側」「教わる側」の関係は先生たちと同じ目線で意見が出し合えて、前より親近感(?)がわいた感じがした。

最後に先生たちの企画に参加して本当に楽しかったです。また企画があったら呼んでください!また、いろいろ得られるものがありました。みんなも同じだと思えます。ですの後輩たちにもこの楽しみを味わって欲しいし「何か」を得て欲しいと思います。そして、どんどん挑戦して欲しいと思います。自分でいうのもなんですが、生徒の顔輝いていたと思います。